

論文の要約

報告番号	① 乙	医 第 1193 号	氏 名	杉野 博崇
学位論文題目	Relation between the serum albumin level and nutrition supply in patients with pressure ulcers : retrospective study in an acute care setting			
<p>論文の要約</p> <p>1974年のButterworthの報告以来、血清アルブミン値は栄養状態を評価する指標として考えられてきた。しかし、血清アルブミン値が正常でも栄養不良である神経性食思不振症の患者や、栄養状態は正常でも血清アルブミン値が低値な外傷や術後の患者、また十分な栄養補給を行い体重が増加しているのにも関わらず血清アルブミン値が上昇しない患者などがある。これらのことより、血清アルブミン値は炎症など様々な要因により影響を受けるので、栄養状態を評価する指標として不適切であるとされている。しかし、褥瘡患者において、低栄養は褥瘡のリスクファクターであり、未だに褥瘡患者の栄養状態を評価する指標として血清アルブミン値が広く利用されている。</p> <p>本研究においては、血清アルブミン値の栄養状態評価における意義を明らかにするために、アルブミンと栄養補給量や炎症との関連について検討した。急性期病院において82名の褥瘡患者（うち53名が院内発生の褥瘡患者）を対象とし、血清アルブミン値と血液検査所見（C反応タンパク（CRP）、赤血球数、白血球数、そしてヘモグロビン値）、摂取エネルギー量、褥瘡の深さと転帰との関係についてレトロスペクティブに検討した。</p> <p>血清アルブミン値は、赤血球数、ヘモグロビン値、CRPとは有意な正相関、CRPとは負の相関が認められたが、摂取エネルギー量とは有意な相関は認められなかった。褥瘡治療前後での血清アルブミン値の変化と摂取エネルギー量には関係がなかった。褥瘡治療開始時から開始後4-8週間後での血清アルブミン値が増加した群はCRPが有意に低下し、アルブミン値が低下した群ではCRPは有意に上昇した。</p> <p>褥瘡の深さと入院時の血清アルブミン値には差はなかった。また、褥瘡が治癒した群では治癒しなかった群と比べ血清アルブミン値が有意に高値であった。死亡群では生存群と比べ入院時の血清アルブミン値が有意に低値であり、死亡群では死亡直前では入院時と比べ血清アルブミン値が有意に低下していた。</p> <p>以上より、急性期病院の褥瘡患者において、血清アルブミン値は栄養状態より、炎症、創治癒や病気の予後を反映していると考えられた。</p> <p>そして、栄養状態を判断するのに血清アルブミン値の高低のみを栄養状態を評価する指標とすることは不適切であり、病歴や、身体所見や、そして血液検査所見などを用いて総合的に栄養状態を判断する必要があると考えられた。</p>				